



TITLE:

<書評>王柳蘭.『越境を生きる雲南系ムスリム-北タイにおける共生とネットワーク』京都:昭和堂, 2011, 404p.

AUTHOR(S):

木村, 自

CITATION:

木村, 自. <書評>王柳蘭.『越境を生きる雲南系ムスリム-北タイにおける共生とネットワーク』京都:昭和堂, 2011, 404p.. 東南アジア研究 2012, 50(1): 146-149

ISSUE DATE:

2012-07-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160936>

RIGHT:

引用文献

- 田中耕司. 1999. 「東南アジアのフロンティア論にむけて——開拓論からのアプローチ」『〈総合的地域研究〉を求めて——東南アジア像を手がかりに』坪内良博（編），75-102 ページ所収. 京都：京都大学学術出版会.
- 鶴見良行. 1987. 『海道の社会史——東南アジア多島海の人びと』東京：朝日新聞社.
- . 1990. 『ナマコの眼』東京：筑摩書房.
- Kathirithamby-Wells, J.; and Villiers, John, eds. 1990. *The Southeast Asian Port and Polity: Rise and Demise*. Singapore: Singapore University Press.
- Ptak, Roderich; and Rothermund, Dietmar, eds. 1991. *Emporia, Commodities, and Entrepreneurs in Asian Maritime Trade, C. 1400-1750*. Stuttgart: Steiner Verlag.
- 王柳蘭『越境を生きる雲南系ムスリム——北タイにおける共生とネットワーク』京都：昭和堂，2011，404p.

は じ め に

民族誌的な作品の魅力は、細部の記述にある。インフォーマントの生の声や、人びとの行動の観察記録などは、私たちの想像力をかきたて、私たちを未知なる世界に引き込む。しかし他方で、作品が細部の記述に終始すれば、人類学的な分析としての価値は半減する。仔細な民族誌的データに忠実になれば、分析の枠組みが不安定になり、逆に分析の枠組みを堅固なものにすれば、民族誌的面白みを犠牲にすることになりかねない。本書は、そうした困難な試みに果敢に取り組んだ、良質の民族誌的作品だ。

同時に本書は資料的価値をも有する。50 年後、100 年後に誰かが、北タイの雲南人コミュニティで調査をするにしても、本書はそれら未来の研究者たちに重要な資料を提供するであろう。本書に収録された詳細な語りや民族誌的記録の隅々に、私たちは新たな発見、新たな価値を見出す。まず

は本書の民族誌的データをもとに、全体を貫くキーワードである「越境」と「共生」にこだわりながら、本書の内容を私の言葉で要約したい。

本書の構成と内容

本書は第 1 章から第 7 章、および終章の、合計八つの章から構成されている。第 1 章から第 7 章までのタイトルと内容は以下のとおり。

第 1 章 目的と方法

第 1 章では、本書の目的と調査対象の紹介、それに先行研究などが示される。理論的な枠組みとして、従来の移民、越境研究を批判的に検討し直し、同化論などから、ディアスポラ論などへ続く系譜を整理する。そのうえで、「地域歴史的なコンテキストに依拠しつつ、かつ国境内外をめぐるネットワークによる多面的な生存戦略から移民の生きる地域と民族間の動態をその地に生きる人びとの視点にそって実証的に明らかにする事例研究ははじまったばかりである」(p.16) として、「移民と地域との関係性を重視し、移民によってどのように地域が創出されるのか」(p.3) を解明することを、移民研究の新たな課題として提示する。

第 2 章 タイへの越境と集落形成の歴史的展開

第 2 章では、北タイにおける雲南人集落の地理的分布と歴史的形成過程が紹介される。本章前半で紹介される北タイの雲南人集落の地理的データは、集落の地理的位置から民族構成、人口規模に至るまで、資料的価値が極めて高い。後半部分では「難民村」の歴史的形成過程を、回想録や伝記を基に再構成する。「難民村」を構成する母体となった「国民党軍という組織」が、「移動過程で多様な民族を吸収して再組織された雑部隊」(p.49) であったこと、「雲南人の中で民族性はさしたる集合的意味を帯びて」おらず、「回や漢といった民族的な背景は自他を区別するうえで」(p.58) 重要性を有していなかったことが示される。また、そもそも「雲南人側から見れば、この時期の北タイ国境というのは、国と国を隔てる分断線としては強く認識されて」おらず、「ビルマ軍からの攻撃を逃

れることができるシェルターであり、身を隠すことができる安全空間として認識されていた」(p. 54)。国民国家の境界は「越境」により無化され、雲南系ムスリムと雲南系漢人との「民族」的な違いも「越境」される。

第3章 雲南系漢人の越境経験と重層的ネットワーク

第3章では、「難民村」に居住する雲南系漢人のライフヒストリーが紹介される。「戦乱、経済的困難、軍事的移動など、多岐にわたる」要因によって、「北タイ国境地域に住む雲南人は一層多様になり、移動ルートも複雑化した」(p. 93)。彼ら彼女らの移住の歴史とルートはあまりにも複雑で多様であり、そのため安易なモデル化は許されず、事例はあくまで個別のストーリーとして提示される。それでも、彼ら彼女らの移住史に通底するものがあるとすれば、やはり「越境」と「共生」の実践である。「中国生まれの雲南人であれ、ビルマの雲南人であれ、彼らはタイ国内での定住先が見つかるまで、雲南人集落の間、場合によっては山地民族の集落も足場にして、移動を繰り返す。こうした移動を支える前提として不可欠なのが、家族、親族といった個人レベルから国民党軍といった軍事組織にいたるまでのネットワークである」(p. 123)。民族や軍属身分の境界は、様々なネットワークを駆使して乗り越えられ、人々は「共生」する。

第4章 雲南系ムスリムの越境経験と交易の変容

第4章から雲南系ムスリムの移住経験に関する記述が始まる。前章で紹介された雲南系漢人と異なり、雲南系ムスリムの北タイへの移住は、100年以上の歴史を有する。初期の北タイへの移住者は、交易の過程で北タイを来訪し、定住した人々である。他方、20世紀半ば以降の雲南系ムスリムの移住は、「雲南系漢人の移住時期とほぼ重なっている」(p. 165)が、しかし彼らのなかには「越境過程において引きつづき交易活動を行っていた人たちが含まれ」「19世紀末に雲南とタイの間の地域間交易に従事していた雲南系ムスリムの延長線上にある」(p. 165)。ただし、「20世紀後半におけ

る雲南系ムスリムの中国からの移動は、彼らが従来依拠していた交易活動とはかならずしも結びつかず、「移動パターンにも変化と多様化」(p. 141)をもたらした。

第5章 タイ国家のなかの雲南人——排除と強まる規制

第5章では、国家が法制度上雲南人をいかに扱ったのかが、法の条文の分析を通して明らかにされる。タイ国家の移民政策、国籍付与政策、共産党対策などの中で、国民党の軍人や家族、民間の商人などが翻弄された様子が的確に描写される。

第6章 民族関係とイスラーム・ネットワークの展開

第6章では、大多数の漢人に囲まれて生きる雲南系ムスリムが、漢人やその他の人々との間で「どのような関係性と生存戦略をもったの」(p. 211)かが分析される。本章の重要な論点は、「難民村」から都市部への再移住である。都市部への再移住は、雲南系漢人と雲南系ムスリムの混住状況から、雲南系ムスリム独自の地区への移行を意味する。「難民村」では、「回教徒も漢人も関係なく」(p. 212)、軍事組織下にいたのに対して、チェンマイ都市部へ移住した雲南系ムスリムたちは、雲南系モスクの周囲に集住し、漢人からもインド・パキスタン系ムスリムからも差異化される。都市部におけるエスニック・コミュニティの産出という、近代都市エスニシティ論の系譜を忠実に再現しているかに見える。しかし、もちろん実体はそれほど単純ではない。

著者は、ある雲南系モスクとそれに付随するイスラーム学校の建設に際して集められた寄付金について、チェンマイ市内にある二つの雲南系ムスリム教区を比較する。サンバコイ教区から集められた寄付金は、雲南系ムスリムからのものが約67%、それ以外が約33%である。他方、バーン・ホー教区からの寄付金は、約90%が雲南系ムスリムからであり、それ以外は約10%に過ぎない。「難民村」からの再移住者を受け入れた二つの雲南系ムスリム地区が、異なる性質を有していることを示している。

第7章 国境の華人社会

雲南人と中華世界との結びつきを扱うのが第7章であるが、ここでも「難民村」と都市部の雲南系ムスリム地区とが比較される。「難民村」においては、雲南系漢人/雲南系ムスリムを問わず、台湾との結び付きが強い。国民党軍を中心に成立した「難民村」には、台湾の政府や慈善団体から多額の資金や援助物資が届き、中国語教育、日常生活など多くの部分で台湾から支援の手が差し伸べられたからである。「台湾は……精神的にはより身近な場」となり、「中国語という語学力を身につけた雲南人二世は、台湾で経済的に活躍する機会を求めて、出稼ぎに行く」(p. 297-298)。

他方で、「都市部バーン・ホー・モスクの雲南ムスリムたちは、台湾よりはむしろ中国とのつながりを重視している」(p. 298)。とは言え、都市の雲南系ムスリムを取り巻く環境は、中国との間の単線的な関係のみでない。都市部のバーン・ホー・モスクで企画された、雲南省騰冲県のモスク落成式ツアーに参加した著者は、そこで北タイと中国という単線的な結び付きを越えた、より広いネットワークの存在を見る。騰冲県のモスクの再建のために集められた寄付金には、タイのみではなく、ミャンマーや台湾からのものも含まれていた。北タイと中華世界との関係は、益々複雑化している。

コメントと疑問

このように、本書は雲南ムスリムの移住をミクロな視点から仔細に分析した良質の民族誌的作品であり、資料的価値も十分に有している。本書の民族誌的水準は十分に評価されるべきことは間違いない。しかし、書評者に与えられた責任は、本書の内容を紹介し、著者の弛まぬ努力に称賛を与えるだけではないのかも知れぬ。コメントや疑問をわずかでも提示しておくことも重要な責務であろう。以下では、「越境」と「共生」について、1点のみ簡単なコメントを提示しておきたい。

本書を貫くキーワードである「越境」と「共生」は、ともに差異を前提としたタームである。越境するためには、境界が存在せねばならない。共生するためには、他者が存在せねばならない。境界

や他者という差異が存在してはじめて意味をなす言葉である。しかし、本当に明確で、本質的な差異が存在しているのか。越境や共生という語を提示したとたん、まるで私たちの眼前には越えられねばならない深い境界や、大きな差異が存在しているかのように見えてしまうのではないか。著者は終章で、「漢人/ムスリムといった弁別は、個人や集団をカテゴライズするうえで固定的なものではなく」(p. 326)と指摘しているにも拘わらず、一貫して雲南系漢人と雲南系ムスリムの「民族」的な違いを、北タイ雲南人社会における本源的な差異を生み出す出発点としているように見える。

本書で使用されている「民族」が何を指しているのか、本書を最後まで読みとおしても判然としなかったのだが、それは「民族」という語が指示しているものが極めて流動的に記述されているのに対して、分析の部分においてはリジッドな存在として提示されているからである。「民族」が違うということについて、本書はどのようにとらえているのかが分らなくなるのが、入信ムスリムの事例である。第3章事例5の周氏(p. 90)は入信ムスリムであるが、この個所では雲南系漢人という「民族」の事例として紹介されている。同様に、第4章の田氏(p. 152)も入信ムスリムであるが、こちらでは雲南系ムスリムという「民族」の事例として紹介されている。入信後の移住と移住後の入信という違いだろうか。あるいは、著者が研究を始めるきっかけとなった、雲南系ムスリムと雲南系漢人の言葉を思い出してみよう。「雲南系ムスリム男性は『雲南の回族も漢族と同じで中国人ですよ。宗教が違うだけだからね』」「さらに彼らは口をそろえて自分たちは『雲南人』だと主張した」(p. 31)。こうした生の声の細部を大切にしたい。

いずれにせよ、「越境」や「共生」という言葉を意味あるものにする差異はいずこから生じるのか。その点をより深く分析することで、移民と「越境」、移民と「共生」をめぐる理論的考察が可能になると思う。そして、本書にはそれを可能にする貴重な民族誌的データが豊富に掲載されている。

お わ り に

最後に、本書のタイトルについて一言述べておきたい。本書のタイトルは『越境を生きる雲南系ムスリム』である。しかし、本書において雲南系ムスリムについて十分に記述されているのは、第4章と第6章、それに第7章の1節のみであり、それ以外の部分では、基本的に雲南系漢人もしくは北タイの雲南人全般の移住や定住に焦点が当てられて記述されている。本書が雲南系ムスリムと雲南系漢人を比較しながら分析を進めていることを考えると、こうした本書の構成には一定の理解を示し得る。しかし、タイトルは書物の内容を一言で表しているはずだ。もう少し工夫してもよかつたのではないか。重箱の隅をつつくような指摘で恐縮だが、一言付しておきたい。

(木村 自・大阪大学大学院人間科学研究科)

平井京之介、『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』東京：NTT出版、2011、257p.

「工場」「東南アジア女性」「近代化」——タイトルに示されたキーワードを目にし、本書を現代の東南アジア版女工哀史であろうと想定した読者はいないだろうか。否、本書はグローバル資本主義の支配関係に取り込まれた女性労働者を扱った「工場のエスノグラフィ」(p.7)ではあるが、その内容は女工哀史ではない。本書は、タイ北部工業団地にある工場で働く若い女性たちに焦点をあわせ、労働によってもたらされた近代性がタイ農村社会のなかでどのように受容されたのかを論じた民族誌である。

本書のアプローチの特徴は、近代的な工場労働に否応なく巻き込まれていく女性の姿を、工場のみならず、農村における家庭生活との連続した時間のなかで捉えたことである。著者は、チェンマイ近郊の工業団地にある日系企業の工場で働きながら、同工場員で観る女性の家に同居し、工場と農村の双方で参与観察やインタビュー調査を行った。そして、そのデータに基づいて、女性たちが伝統的価値観へ恭順を示しながら近代的な工場労働

に適応し、なおかつ家庭生活を創造的に再編成していく様を描き出している。そのことによって、既存の東南アジアにおける女性工場労働者の研究が、「搾取」を画一的な概念として無批判に前提としており、生活者としての女性たちが何を基準に搾取と認め、抵抗する/しないのかという地域の視点を見過ごしてきたことを浮き彫りにした。以下、章立てに沿って本書を要約した後、本書の議論が東南アジアにおける女性労働論に対して提起する問題を示し、評者のコメントとしたい。

「工場のエスノグラフィ」は、農村における伝統的な仕事観や行動パターンの記述から始まる(第1章)。北タイ農村において「仕事」(*ngan*)とは、農業や賃金労働、家の中の仕事(料理や掃除、洗濯、裁縫、育児や介護、健康管理、家族関係の維持を含む)、および儀礼などの活動であり、それらは「経済活動というよりは社会活動なのであって、他の社会関係から独立したものとして考えられていない」(p.27-28)。稲刈り時の雇用取引の事例では、雇用主はこれまでに付き合いのある近親者や隣人、友人らを、長期的でより親密な相互扶助的関係を見据えたうえで、労働者として「請う」。雇用者は、報酬が支払われるにもかかわらず、助けてくれる者として思いやりの気持ちをもって雇われ、食事などのもてなしを受ける。両者は、作業テンポを駆け引きしながら作業全体の秩序を維持する、あるいはゴシップで互いの行動を統制しながら作業することで、より親密な関係を築いていく。

続いて舞台は工場へと移り、北タイ農村女性たちが、上司や同僚との相互行為においても伝統的な農村社会の仕事観を用いながら工場労働に適応していく姿が論じられる(第2章、第3章)。舞台となる工場は、プラスチック製文具の下請け製造工場で、労働者の8割が組立課に所属し、組織の末端に属する組立作業専門の労働者(オペレーター)は全員が女性である。工場内では、労働者と日本人社長、およびマネージャーとの間で直接会話はなされない。業務命令は、タイ人マネージャーや課責任者を介して伝わり、問題発生時も労働者間でのみやり取りが行われる。労働者の採用も課責任者に一任され、現従業員と親族関係に